

令和 6年12月23日

亀山市議会議長 岡本公秀 様

研修報告書

会 派 名	豊田 恵理
報 告 議 員 名	豊田 恵理
参 加 議 員 名	豊田 恵理
研 修 日	令和6年10月31日 ~ 11月1日
研 修 目 的 等	全国若手議会議員の会OB会 研修会 場所：宇都宮市、真岡市
研修の概要	
<p>10月31日 国産へりを活用した防災・救急分野での役割と可能性について</p> <p>11月1日 真岡市における新庁舎建設・中心市街地活性化の取り組み LRT及びJR宇都宮駅周辺再開発について</p> <p>詳細は次頁へ</p>	

■国産ヘリを活用した防災・救急分野での役割と可能性について

栃木県宇都宮市のスバル航空宇宙カンパニーで「国産ヘリコプターによる防災・救急分野での活用の提案」について話を伺った。

まずスバル BELL412EPI（国内で一番使われていたヘリ）の説明があり、この 412 シリーズは東日本大震災では多くの実績を残したそうである。狭い山間地や不整地着陸に対応可能であり、能登半島地震では元旦 1 日に大阪府八尾から UH1J が離陸し映像を配信したなど、今までにも災害時に大いに貢献した実績を有している。

次に国産ヘリコプターのメリットについて話を伺った。現在でも日本ではほとんどが外国産のヘリコプターを使っているが、外国製のものは修理や点検、部品調達にも大変な時間と費用がかかる。一度整備に出してしまうと半年くらいはかかるので、その間の代替品が必要となり結局 2 機所有しなければならないなど、課題は多いのだそうだ。しかしスバルの国産ヘリコプターなら機体の組み立てライン、生産基盤を持っているのはここだけであるから、比較的短期で整備ができ、「維持費が非常に安いのがウチの売り」だそうで、長い目で見ればコスト面にも安価で対応できるとのこと。

「外国産を使うことで、後々どんどんコストがかかるのを、苦しんでいるのをずっと見てきた。国内で部品作ってそれをなんとかしたいと思った」とのコメントが印象的だった。

なお、今回の視察は特別守秘義務が多く、写真や資料等も掲載不可なものが多かったため詳細を記すことはできないが、研修では工場や整備機体など多くの施設を見学することができた。

国産ヘリコプターについては、亀山市などの自治体には直接関係するものではないが、三重県では数年前から空飛ぶ車構想について動いており、いずれは空を使った事業が出てくるかもしれないので将来的視野に入れておくためにも良い機会であった。

■真岡市における新庁舎建設・中心市街地活性化の取り組み

栃木県真岡市の新庁舎について視察研修を受けた。

<新庁舎建設の経緯>

真岡市の新庁舎建設にかかる経緯について聞いた。現在の駐車場部分には旧庁舎があったが、昭和 32 年に建設された旧真岡庁舎は、東日本大震災が発生した時、震度 6.5 で天井が落下するなどの被害があり、外にテントを張って災害対策本部とした。そのような状況であったため、新庁舎建設に対して市民からの反対はなかった。市民会議を作り、広く意見を集められるよう 40 名の市民代表がおり、分野ごとに会議を開催したということだった。

現在新庁舎の建っている土地は以前、栃木県の芳賀庁舎があった場所で、県と市の間で公有地交換しようということになってこの場所に決まった。そのため用地買収はほとんどなかった。また新庁舎建設中も旧庁舎を利用したので仮設庁舎は作らなかった。当時市内に候補地は 8 か所あったが、検討委員会で防災上の課題や上下水道の有

無、公共交通アクセス、財政状況など総合的に判断して現在の場所に決定している。この5階建て庁舎は物価高騰前で工事費・解体費が76.2億円、これには庁舎建設基金45億円や合併特例債を使用した。すぐ横には五行川が流れ、真岡市役所は浸水想定区域内に建てられているため、様々な浸水対策が行われている。

<施設概要>

旧庁舎は分散していたので集約化をはかっている。また避難所指定にはなっておらず、災害時は庁舎が機能できる設備となっている。その他、環境への配慮、太陽光パネルの設置、空調設備、地下熱や地下水の利用など。

1階は利用者に分かり易いよう広いフロアを全面的に使い、窓口10課が並んで一日800人が利用する。「省エネに配慮した災害に強い庁舎」として、浸水区域であることを考慮して1m嵩上げた1階には市民サービス機能を、2階に災害対応を行う課がそろっており、災害時に対応するFM局もある。3階は管理部門を配置し、災害対策室となる会議室や非常用発電機となるコンセントや電話も配備、4階は大会議室として使用できる仕様となっており、夜間と土日は一般への貸し出しも行っている。5階と最上階は電気室や非常用発電機、災害時の電源確保のための太陽光パネルが設置されている。免震構造を採用しており、地下には雨水貯留槽を作り雨水でトイレを使用できるようにし、緊急汚水槽を設置している（マンホールトイレも検討はしたということだった）。

この特徴的な形の庁舎は1階を広くとり、2階以上をコンパクトにすることで、1階屋根部分が広い青空スペースになっている。そこへは外から広いスペースのある階段とスロープがあり、浸水時に外から上がることもでき、普段は青空テラス部分として市民や職員の昼食スペースをとったり、左手前部分は市民プラザとしてイベントで利用したり、災害時は支援作業スペースとなる。

<所感>

浸水想定区域と分かりながら建設しているので、浸水・洪水時に対する備えが重層的であると感じた。一方で周囲を見ると複合交流施設や広い駐車場、その他にも複数の公的施設が集約しておりコンパクトシティを目指していることが伺える。今回私は防災機能を重視していたのと、研修時間が短かったので、なかなかそれ以外の工夫や細部の特徴まで伺えなかったのが残念であるが、機能的で快適な庁舎であったと感じた。